



# 「挑んでみようじゃないか！」 今までの国際交流員体験

宮城県経済商工観光部国際経済・交流課国際交流員

Luke Happle

ルーク・ハップル

朝日が会議室の窓を通して、テーブルまで差し込んでいる。部屋の中には10人ほどの人々がいるにもかかわらず、沈黙に包まれている。小さな椅子に座り、留められた背広の上着のボタンがきつく感じられる。まもなく県知事が部屋に現れ、大使との表敬訪問の通訳が始まることになる。うまく通訳しないと、お互いの言っていることが理解できないままになってしまう。部屋にいる皆が私に期待している。ノートを持つ手に汗をかき、鼓動が早く波打っているのがわかる。突然ドアが開き、県知事が入ってくる。深呼吸をして、知事のそばまで歩いていく。

少し大げさかもしれませんが、このようなことを体験した国際交流員の方々が多くいるのではないかと思います。それとも、「なんでこんなにぎりぎりの依頼の仕事は自分は承諾してしまったのか」と思いながら、ノートパソコンに覆いかぶさるようにして座り、自分の国についての発表原稿を熱心に書いていたときの方が記憶に残っているかもしれません。ALTの場合なら、授業が始まる10分前に授業内容がJTE（日本人英語教師）に変えられたときが記憶に残るでしょう。

私がJETプログラムに参加してわかったことは、JET参加者として日常的な仕事でストレスを感じる場面や困難に立ち向かうことになる場面が多くあるのにもかかわらず、このような出来事があるからこそ人生に満足して、人間として成長できるようになるのではないかということです。

2008年にJETプログラム「国際交流員」に申



イタリア出張の最後の夜、同僚と東北大学の江刺教授と夕食

し込み、ラッキーなことに成功しました。国際交流員として働いた経験のある友人に相談をし、CIRハンドブックを全編残らず読んでも、仕事内容は一体どういうものなのかあまりピンときませんでした。来日して初めて通訳、翻訳、学校訪問等、仕事は多岐の分野をわたることがわかりました。

私にとって最も刺激があり、能力も試される仕事の一つは通訳です。大使館関係者と宮城県知事との表敬訪問やイタリア出張でのビジネスミーティングの通訳、県議会議員の方々との食事会など、様々な場面で通訳体験を重ねることができました。通訳をする速さと即時性は、一番刺激を感じるところです。話されていることに全力で集中して、遅れず、何も加えず、何も逃さず、目標言語に通訳せねばなりません。通訳の仕事をして、いかに事前準備をしておいても、人間とは必ずミスするものだという自分の弱点にも気がつきました。

例えば、私が茶道体験を行う海外の来賓に通訳



ロースト・ディナーを楽しんでいる料理講座受講生

を行ったときのことで。通訳の内容はしっかりと準備しておきましたが、長い間の正座に慣れておらず、足がどんどん痛くなり、通訳に集中できなくなりました。通訳者は目に見えないものであるべきだとよくいわれますが、そわそわしているその時の私はとても目立ってしまいました。立ち上がるときに部屋の皆が大爆笑したというのはいうまでもありません。考えてみれば、事前に正座練習をしていた方が良かったのではないかと思います。

国際交流員として働いて、草の根のレベルでの国際化にも取り組むチャンスがありました。特に成功したのは「本当はうまい！ イギリス料理」という料理講座です。イギリス料理またはイングランド料理に対する否定的なステレオタイプの見方を打破し、伝統的なイギリス料理を広めるというのは交流員として来日する前からの目標でもありました。1年間様々な努力を重ね、ついに実現できたことはとても満足できるものでした。今まで宮城県内の様々な地で、約20人の受講生に伝統的なイギリス料理2品の作り方を紹介する講座を4回行うことができました。アンケート結果には好意的な反応が多くありました。

料理講座、国際祭り、国際交流イベント、学校訪問等に参加して、これらの国際化における必要性を実感しました。いろいろな国の方々と交流できるのみならず、異文化についても学ぶことができます。一方、このようなイベントの限界についても気がつき始めました。交流はそのイベントで行われず、表面的な交流しかできないことが多

いのではないかと感じています。海外の人々についてのステレオタイプを打破するのではなく、逆に強化し、地域の外国人をコミュニティに溶け込ませるよりむしろ疎遠にしてしまう恐れがあるのではないでしょう



CIR中間研修会、イギリス人の国際交流員

か。興味を引く新たな交流の形を考え出す必要性があると思います、私自身の今後の課題でもあると考えています。

今までの国際交流員としての仕事は「バリアー・フリー」とまではいえませんが、大変有意義で貴重な経験であったと思います。大学から出たばかりの人間に私が得たような機会を与えてくれる仕事は国際交流員だけかもしれません。宮城県での取り組みを通して様々な人々に好ましい影響を与えることができたと感じています。また今まで一緒に仕事をした優秀なJET参加者、オフィスの同僚や宮城県民の方々に接することで、私がここまで成長できたのではないかと思います。

次回、挑戦しなければならぬことに直面した時には、今まで自分がやり遂げたことを振り返ってみてください。必ずしも楽ではないものの、頑張っ乗り越えるだけの価値があるものだと思います。これからも頑張りましょう！



Luke Happle

イギリス、サウスアンブトン市出身。慶応義塾大学で1年間の留学も含め、ロンドン大学SOAS「東洋アフリカ研究院」で日本語を専攻しました。社会人類学についても関心を持ち、4年生になり、その勉強も始めました。卒業後、2009年7月にまた来日し、宮城県仙台市で国際交流員として着任しました。趣味はギター、料理、旅行、読書。



## “荷物”

沖縄県立中部商業高等学校外国語指導助手  
Jacqueline Toulson  
ジャクリン・トーンソン

荷物。私たちJETのキャリアは荷物で始まって、荷物で終わる。今は来年の8月の強制転居——もうJET 5年目ですか？それで十分じゃない？帰った方がいいと思うよ。あ、あと、鍵も返してくださいね——について考えると、この持って帰る荷物のことで頭がいっぱいになります。

2006年8月、20キロの鞆と23年の人生経験と一緒に沖縄に来ました。私より経験が豊富な他のALTの人たちがたくさんいました。その人たちよりも、私の荷物や経験は軽く、とても不安でした。5年前にインターネットで、英語で「沖縄」を検索してもほとんど情報がありませんでした。沖縄へ来る前にはベスト・キッドの宮城先生、キル・ビルの服部半蔵、多い軍人人口以外に沖縄のことは何も知りませんでした。幸いにも、一緒に着いたALTもあまりわかりませんでしたから、そのおかげで、私たちは早く仲良くなれました。その友情は絶対に永遠に続くことでしょう。

それから、中部商業高等学校と鏡が丘特別支援学校で働き始めました。私はこの2種類の学校について知識が全然なくて、その学校にいたみんなも私の国、南アフリカについて何も知りませんでした。

私はその後の週（月、年）に出会った人たちみんなに南アフリカのことを教えつつ、みんなからは沖縄のことを教わりました。私とみんなの国のいくつかの相違の中には、びっくりさせられるような類似点も見つけました。南アフリカでは「ウブントゥ」という原理があります。ウブントゥの

意味は「私という人間がいるのは我々みんなのおかげです」。他の言葉で言えば、自分の成功は自分のおかげだけではなく、周りのみんなの努力や影響などのおかげだということです。沖縄では「ゆいまーる」という言葉に、それと似ている考え方があります。

私は沖縄に来た後すぐに愛と温もりに囲まれるのを感じました。お盆を経験するために学校の同僚の家へ誘われたり、沖縄のドライビング・ツアーに連れ出されたり、沖縄そばをいっぱい食べたりしました。私が大学で写真の勉強をしたということ、同僚たちはすぐに最初の文化祭で写真の展覧会を計画してくれました。

たくさんの温もりがあって、私は今の私になることができました。他の先生たちや生徒も、私の役に立つ助言をくれたり、授業で失敗しても見守ってくれて、馬鹿げた授業も支えてくれました。



2011年、全国商業高等学校英語スピーチコンテスト：チーム沖縄





沖縄のALTたち、コマカ無人島への旅行

私はそのおかげでいい教師になれたと思いますし、スピーチ・コンテストの強豪になりました（レベルが低いといわれていた学校なのに、3年間参加したスピーチ・コンテストでは、生徒は全員3位以内に入りました）。

今年は沖縄とALTのコミュニティーに、小さいながらもできる限りの恩返しをしてきました。最近では沖縄スペシャル・オリンピックで通訳者としての仕事を進んで引き受けました。嘉手納基地の軍人といろいろな特別支援学校の生徒との間の通訳は有意義な経験だけでなく、子供たちと遊んだり、サポーターと応援の言葉を叫んだりしたことはとても楽しかったです。

学校では一生懸命に生徒とスピーチ・コンテストの練習をしていました。今年の生徒はとても意欲的なので、遅くまで私の「ティーム・フォーエヴァー」と一緒に発音とイントネーションの細かいニュアンスを練習することはいつものように大変ではなく、本当に楽しかったです。

最後に、私のJET生活はもう一つの写真展覧会で終わります。他の特別支援学校の先生と一緒に沖縄県立美術館で展覧会を計画しています。自分の写真では、いろいろなALTと沖縄の人たちを特集しています。今までとても大変でしたが、こんなステキな人たちと時間を過ごすことは価値のあることでした。

こんなことをしている間に、南アフリカへ帰ることも心に浮かんでいます。帰るときに何を持っ



沖縄国際大学のイングリッシュ・キャンプ

ていけばいいのかを考えると、もちろん小さな装身具や、もらったプレゼントや琉球グラスなどは絶対に持っていかないといけないと思います。

でも、私は物質的なもの自体はそんなに大切ではないとだんだん気づいてきました。初めて経験したことや今まで知らなかった知識や自己認識や生涯続く友達や素晴らしい思い出なども荷物として持って帰ります。その荷物はこれからずっと大事にします。

沖縄へ戻れるかどうかまだわかりませんが、持って帰る荷物の代わりに、沖縄では私の一部（5年間に沖縄の美味しい料理をいっぱい食べましたので、その部分は多分かなり大きいのだと思いますが…）がずっと残っています。

沖縄へ、にふえーで一びる。

あなたのことは、一生忘れません。



Jacqueline Toulson

南アフリカ出身のジャクリーン・トーンソンです。4年半の間に沖縄県の中部商業高等学校と鏡が丘と特別支援学校で働いています。大学でジャーナリズムと言語学を勉強して、卒業して日本へ来ました。今年は南アフリカへ帰って、記者の関係の仕事を探すつもりです。

# Challenges, Conferences and Coordinating: Being

The morning light shines through the windows of the conference room onto the table. Even though there are only 10 people in the room, the silence is deafening. I am sitting on a small chair feeling constricted by my suit jacket with its single button done up tightly. Soon, the prefectural governor will enter the room and I will have to interpret for him as he meets with a prominent political figure making a courtesy visit. Their understanding each other depends on the quality of my interpreting and the expectation to perform well weighs heavy. Palms sweating and heart racing, I cling to my electronic dictionary, note paper and pen nervously. Without warning, the door opens and the governor enters. I take a deep breath, stand, and walk to his side.

While slightly exaggerated, I am sure there are many CIRs who have been in similar situations. Or perhaps more memorable still is that evening at gone midnight when you were still working on the presentation about your home country you had to give the next morning; frantically typing, cursing yourself for accepting the job at such late notice? Or for ALTs, the time your JTE changed the lesson plan without telling you? The point is there are many situations that JETs face in their day-to-day working lives that can be challenging and stressful. However, if there is one thing the JET Programme has taught me it's that it is precisely these challenging situations that make life rewarding and satisfying.

I applied for the JET Programme CIR position in 2008 and was lucky enough to be successful, coming to Miyagi prefecture in June 2009. Despite talking with friends who had experience of the position and reading the CIR Handbook back to front several times, I was still unsure exactly what kind of work I would be doing. After arriving it became clear I would be a 'jack of all trades', involved in activities ranging from interpreting and translation to occasional English teaching and school visits.

One thing that I have found to be an extremely exhilarating and challenging part of my job is interpreting. I have had the chance to interpret for official courtesy visits to the governor of Miyagi prefecture, for embassy officials visiting the prefecture, at business meetings during a business trip to Italy, for prefectural assemblymen and in countless other situations. I find the fast paced, immediate nature of interpreting the most stimulating part; you have to concentrate 100 percent on what is being said and then reproduce it in the target language without adding or taking anything away and with as little delay as possible. Interpreting has also helped me come to terms with my own limitations and realise that no matter how much effort you put into preparing, nobody is perfect and mistakes will be made. A perfect example of this is when I was interpreting for an overseas guest as she took part in *sado* (Japanese tea ceremony). I had prepared for the interpreting thoroughly. However, unaccustomed as I was to sitting in the *seiza* (legs tucked under in a kneeling position) position for long periods of time, I found it increasingly difficult

## “Baggage”

Baggage. Our JET careers both start and end with it. As I think ahead to August 2011, when I'll be forcibly removed from Japan ("You're on your fifth? I think you've had enough, dear. You'd better go home. Oh, and turn in your keys, too.") my thoughts are consumed by the baggage I'll be taking with me.

I came to Okinawa in August 2006, along with my 20 kilogram-suitcase and 23 years of life experience. I packed lighter, both materially and emotionally, than I have seen many other ALTs do, and within a few months, thanks to a warm reception and the fact that you can actually find deodorant, toothpaste, etc in Japan, had thrown most of that away anyway.

Researching Okinawa in English on the Internet five years ago yielded few results. Besides Mr Miyagi, Hatori Hanzo and a large military population, I knew nothing about Okinawa. Luckily, neither did most of the people I arrived with. We quickly became fast friends - friendships I know will endure for the rest of our lives.

I started work at Chubu Commercial High School and Kagamigaoka Special Needs School. I had no knowledge of either type of school, and no one at either had any knowledge of my country - South Africa.

I spent the next few weeks (months, years) teaching everyone

I came into contact with about my home, and being taught by everyone I met about Okinawa. Among the many things we discovered to be different about our homes, it turned out that we had some astonishing things in common. In South Africa, we have a philosophy known as "Ubuntu", summed up as "I am what I am because of who we are." It is a philosophy of togetherness - knowing that what you become is not the product of your own efforts, but of those and the influence of everyone around you. There is a similar idea known in Okinawa as "Yuimaru" - a co-operative effort.

I found myself immediately surrounded by warmth and love in Okinawa. I was invited to my colleagues' homes to celebrate Obon, given driving tours of the island and fed copious amounts of Okinawa soba. When they found out I studied photography at university, they immediately set up an exhibition of my work at my first-ever school festival, even though they had never seen anything I had done.

Most importantly, though, I was guided into becoming the person I am today. My fellow teachers and even some students gave me indispensable teaching advice, didn't look harshly upon me when I messed everything up, and supported me through all my harebrained class activities. I feel I have turned into a good teacher, and a formidable opponent at speech contests (even though my schools are considered "low-level", my students from both schools

## a CIR So Far

Luke Happle

to concentrate on what was being said as the alarmingly extreme pain was spreading through my legs. As an interpreter they say you should be invisible; with my evident discomfort and constant fidgeting, I definitely was not. Needless to say, everyone had a good laugh when I tried to get up at the end of the ceremony. If I had given it more thought I would have realised that at least some rudimentary *seiza* practice would be necessary.

I have also had an opportunity to be involved in more grassroots internationalisation efforts. Something that I am particularly proud of is a series of British/English cooking classes that I initiated. Destroying negative stereotypes about food from Great Britain and promoting traditional English food was something that I knew I wanted to do even before I came to Japan as a CIR, so to work on planning classes for a year and then see them actually come to fruition and be successful is extremely satisfying for me. I have done 4 separate classes so far that have seen me travel to various locations in Miyagi prefecture and teach classes of roughly 20 students to cook 2 dishes (normally a main course and a dessert). To measure how successful the classes have been, we also handed out questionnaires and so far the responses have been encouragingly positive.

Through carrying out these cooking classes and participating in various international festivals, international exchange events and school visits I have realised that they are an essential part of internationalisation efforts in Japan. They provide a fun way

of not only interacting with people from other countries but also learning about other cultures. I have, however, also begun to get a sense of the limitations of such events. The exchange tends to end when the event does and can be superficial in a lot of ways. Sometimes these kind of events end up reinforcing stereotypes about people from other countries rather than debunking them and can serve to further alienate rather than accommodate non-Japanese people into the community. I see it as my challenge for the coming months to think of and initiate new and interesting ways to promote deeper kinds of cultural exchange.

My experience as a CIR has so far, while far from “barrier-free”, been an extremely positive one and I can think of no other job that could offer a graduate straight out of university the multitude of opportunities that I have had. I like to think that through my work here, I have had a positive influence on many people and I know for a fact that I have gained a lot through my contact with the many talented and motivated JET participants, office co-workers and members of the general public that I have had the chance to work with.

So, next time you find yourself waiting nervously in that conference room, staring at an empty word document on a laptop screen despondently, or hurriedly adapting a lesson plan, take a moment for quiet reflection. There is no doubt that it can be hard, but then nothing worth doing is easy!

英語

## Jacqueline Toulson

have received prizes in every speech contest entered for the last three years) thanks to their guidance and patience.

In some small form of repayment, I have been trying this year to give back to the Okinawan and ALT community as much as possible. I act as a member of the Okinawan support team - whenever any ALT has any kind of problem, they call us and we try to help them through it.

I have also been participating in as many cultural activities and volunteer activities as I can. Recently I acted as an interpreter at the Okinawa Special Olympics, translating between military members (it was held on the Kadena military base) and students from special needs schools from around Okinawa. Not only was this a worthwhile experience, but also a really fun day, running around with the kids and shouting words of encouragement with the military supporters.

I've been putting my heart and soul into this year's speech contests. I have been blessed to have a group of students with amazing levels of motivation, so spending long hours with my four “Team Forever” students perfecting all pronunciation and every subtle intonation nuance has not nearly been the chore it could have been.

Lastly, I'm ending my JET career with another photographic

exhibition. Another special needs school teacher and I are working together to produce an exhibition to be held at the Okinawa Prefectural Art Gallery. I am featuring other ALTs and teachers heavily in my pictures, and while it has been a lot of work, it has also been tremendously rewarding being able to spend time with these wonderful people.

While still involved with all of these things, I have begun to think about leaving Japan and all I will take with me. Physically, all the trinkets, the gifts, the lovely Ryukyu (Okinawan) glass that I somehow have to make space for.

Mostly, though, I am realising that the physical things don't matter that much. I will be taking with me a new-found knowledge and sense of self coupled with lifelong friends and amazing memories. Whether I will be able to come back here or not I do not yet know, but, in exchange for all the things I'll be taking with me, a piece (a rather large piece thanks to all the delicious Okinawan food inhaled over the past five years) of me will always remain here.

Nifedēbiru, Okinawa.  
I'll never forget you.

英語